

第1回米産業活性化のための意見交換の主な意見

令和5年1月25日

米の生産から消費に至るビジネスに関わる関係者が参集し、情報共有を行うための意見交換を実施。有識者による基調講演、農水省からの関連情報の提供の後、各者から意見を述べた。

1. 基調講演と情報提供

○「主食用米需要の見通しと海外市場の開拓」茨城大学 西川臨時委員

- ・米の需要拡大には、主食用米需要の逆転、非主食用米需要の拡大、海外需要の開拓の3つの選択肢があるが、当初の想定より主食用米需要の減少が加速しており、海外需要開拓の動きが進んでいる。
- ・米の輸出は少しずつ増加、米加工品では特に日本酒の輸出が大きく増加しており、米消費量は日本では減少する一方、アメリカでは増加中。海外に行くと日本食・日本酒ブームを実感。
- ・近年、米のFOB価格は低下しており、海外市場において日本産米が日本産米と海外産米の両方と競合する状況。米加工品の輸出は、国内の雇用創出に繋がるメリットもあり、米よりも清酒輸出の増加していることから、付加価値を高めることが重要。
- ・米の国際競争力を高めるには、生産コストが高い（日本は海外と比べ、特に単収が低く、農場規模が小さい）ことが課題であるが、規模の拡大では敵わないので、単収を高める多収米を導入することでキャッチアップしていくべき。また、流通コスト削減も今後検討の必要。
- ・海外は日本人ほど食味にこだわらないが、食味テストをしても海外産と国産であまり大差がない状況から、食味を海外輸出の強みにするのは難しいかもしれない。
- ・カリフォルニア産と日本産米の価格が接近している状況について、今後の見通しは難しいが、輸送コストもかかることから、価格の逆転まで継続的に起こるかは疑問。

○「生産者の結束と新しい試みで、コメの商流に改革を」百笑市場 染野臨時委員

- ・米生産農家創業の米卸法人であり、国内需給の安定・生産農家の所得向上・世界への食料供給に寄与することを目的に創立。生産から販売までを一気通貫で行うことで価格競争力を高めた。契約農家との大規模生産、安定供給を実現し、昨年はFSSC22000の運用も開始。今年にはトレーサビリティの可視化を実施予定。
- ・8年前に輸出を開始し、当初は香港・シンガポールへの輸出を試みたが、既に日本産米の棚争いがなされていたため、カリフォルニアへの輸出に挑戦。県内農家にも共同輸出を声がけし、若手農家を中心に参加農家を拡大。初年度60トン→令和4年1,100トン→令和5年産2100トン輸出予定。国内も合わせれば3600トンを出荷予定。輸出先国は、現在12か国→18か国に拡大予

定。

- ・取扱商品は、最近多いのは多収米。初めはカリフォルニアでの精米が上手くいかず、日本で精米後に輸出すると輸送中の虫の発生が懸念されたことから、炭酸ガスや脱気による真空パックで輸出。現在は東京港渡しで為替リスクをヘッジし日本円で取引。
- ・コロナ渦では、コンテナ不足や海上輸送運賃の高騰があり、こうしたリスクは農家での対応は困難なため、FOBでの輸出を実施。
- ・茨城県産米輸出協議会として、茨城県内の担い手農家が参加。
- ・生産者と輸出先国へ渡航し、店頭での試食付きの販売促進活動を実施。供給を上回る需要を生むとともに、渡航した生産者の生産意欲向上に大きく寄与。
- ・参加農家の拡大には、友人農家への声かけから開始し、県庁を通じて米生産者の集いでも募集。輸出用は1俵7,000円程度と安価なため、最初は乗り気でなくとも、多収米を用いて10aあたりの収入で考えてもらうよう説明した。また、現地へ訪問し、反応を知ることができる機会を設けている。
- ・肥料高には苦しんでいるが、百笑市場がメーカーからの直接取引を進めて、契約農家へ一般小売価格より農薬・肥料を少しでも安く提供している。

○「米をめぐる状況について」農林水産省農産局 三野企画課長

- ・4年産の主食用米の作付面積は前年比5.2万ha▲の125.1万ha、作況は100。4年産米の飼料用米は14.2万haと2年で倍増しており、作付転換が進展。
- ・需給見通しについて、4/5年はコロナ渦による短期の減少はありうるが、需要は回復の見通し。5/6年は4年度と同程度の作付転換が必要。
- ・主食用米の需要が毎年約10万トン/年程度減少すると見込まれる中、令和3年の販売数量の対前年比は、小売事業者向け▲3%、中食・外食事業者向け+2%となり、合計では▲1%。令和4年11月は、小売向け、中食・外食向けともに対前年比±0%。
- ・民間在庫は主産地を中心に前年より減。
- ・令和4年産米の相対取引価格（令和4年12月）は、全銘柄平均で前月差+21円の13,920円/60kgとなり、出回りからの年産平均価格は前年産+1,076円の13,880円/60kgとなったところ。スポット価格も前年産より高価格でスタートし、比較的安価な銘柄を中心に上昇傾向。
- ・コメの輸出は2万トンを超え、前年比対27%増（令和4年1~11月）。米・米加工品の輸出実績（令和4年1~11月）は48,914トン（対前年同期比+18%）。パックご飯、米菓、日本酒の輸出も近年で増加傾向。
- ・令和2年に策定した輸出拡大実行戦略にて、米・パックご飯・米粉及び米粉製品の輸出目標を設定。オールジャパンで輸出促進を行うため、令和4年に（一社）全日本コメ・コメ関連食品輸出促進協議会（全米輸）が品目団体として認定。これまで商談会等の海外需要開拓等を実施してきており、農水省でも支援を行い、引き続き需要開拓、現地ニーズ把握等を行っていく考え。

○卸売業者及び実需者の委員から米・米加工品等に関する情報提供

- ・健康がキーワードになっており、玄米精製したものを販売できるようになれ

ば、より食べやすい米として提供できる可能性。有機米など環境に配慮した商品は、生産者も減ってきており、量が確保できれば取り扱いたいとの声がある。家庭用では食味が良く高価格のものが流通しているが、多収米であればより安く提供が可能のため販売要望がある。(木徳神糧・今野委員)

- ・コロナで需要が激減したことで米相場が暴落し、産地は非食用米への作付転換を求められた結果、令和4年産米は、需要回復した業務用米が不足しつつある状況。2・3年産米の在庫があるため対応できているが、5年産米も同様の傾向が続かないか不安。産地の手取り回復が最優先。各産地の個性ある米生産が人気であるが、中長期的な傾向は家庭用内食から業務用外食・中食にシフトしており、共通銘柄化などにより、令和5年産から需要に応じた生産をお願いしたい。(伊藤忠食糧・佐藤委員)
- ・日本酒について、輸出が好調に転じ、国内での業務用需要の回復もあり、メーカーでは秋口から生産を強化していた。5年産での酒造好適米の作柄及び需要動向次第では5年産における原料供給不足の心配もあり。加工用需要に回る米は、競合する味噌メーカー等の綱引きもあり、相場が上がっていくことも予想。(千田みずほ・妹尾委員)
- ・外食では、ユーザーは量・品質・価格の安定供給を求めており、年産にはあまりこだわりはない。ユーザーは現場の混乱を防ぐためか、使い慣れた同じ銘柄を好む傾向があり、新銘柄はサンプルを試す必要。その年の新米は必ずテストするユーザーもおおり、粘りなど品質により使用できないといった判断もあり得るため、安ければ良いわけではない。4年産のコンペ調達は対応が難しい。(むらせ・人見委員)
- ・宅配弁当、おにぎり等調理済み食品の製造・販売事業を実施。商品に合わせた米の選定のため、産地訪問を行い生産現場を学ぶとともに、自社の要望銘柄を伝え、次年度の調達に活用。商品特性に合った使用銘柄を使い分け。ICT農法を活用し、生産効率の向上・持続可能な栽培に取り組む産地を求めており、価格変動が小さくできる工夫をしていきたい。(わらべや日洋・吉田委員)

2. 意見交換

【現下の需給と今後の見通しについて】

- ・北海道は4年産作況指数106の一方で、作付は7%深堀削減したため、前年比4万トン減。販売量は前年比1割増できている。2、3年産の在庫量も大きく減っており、北海道産米の需給は相当改善。5年産も4年産の実績並みの生産目安で設定して進める予定。肥料の値上がりをカバーし再生産可能としていきたい。(ホクレン・南委員)
- ・高級ブランド米だけでなく、反当り収入の確保にしっかり取り組みたい。北海道の奨励品種に業務用に対応するものを出せそうである。(ホクレン・南委員)
- ・需給は均衡・改善しつつあるが、2年産・3年産在庫の販売も継続しているため、全体の中で何とか均衡を保っている状況。(全農・藤井委員)
- ・生産サイドとしては、再生産可能な価格水準とする取組みが必要。肥料高騰

は今後さらに課題となる。(全農・藤井委員)

- ・府県で業務用需要に対応する有望品種がでてくるのには時間がかかるが、高価格帯品種に作付けが集中すると需要とアンマッチになるので、各産地は需要をよく見極め、5年産の作付品種を検討する必要。(全農・藤井委員)
- ・小麦製品同様に米も本音では値上げしたい。4年産米が値上がりしていると報道されているが、値上がりの実感はない。5年産の契約交渉においても値下げ圧は強い。コロナ禍でも5年間価格を変えずに取引くださる実需もいるので、今後も大事にしたい。(フクハラファーム・福原委員)
- ・4年産の集荷状況はよくなく、産地からは、作況以上に穫れていないとの話がある。4年産米の価格が上昇したことにより、5年産で急激に飼料用米から主食用米の作付に戻るようなことがないよう需要に応じた生産の推進が必要。(全集連・辻委員)
- ・中食・外食需要が増えるところ数年の需要と変わってくるため、取引の仕方、価格水準が変わってくるだろうことがポイント。(茨城大学・西川委員)

【その他】

- ・5年産については、インボイス制度導入により、米の集荷の流れがどのように変わるのか気にかかる。(全集連・辻委員)
- ・カリフォルニア米も値上がりしているので、米菓等 MA 米を使用しているものについて、国産に切り替えられないかと取り組んでいるが、まだ、コスト的にもう一息見合わないというところ(ホクレン・南委員)。
- ・加工用米について、5年産はリノベ事業の内容が継続するため、買い手との価格交渉で耐えられるが、6年産以降が不透明で不安がある。(フクハラファーム・福原委員)
- ・非主食用米を作っていきたいといった生産者の希望や意識が再生協に伝わっていない。(フクハラファーム・福原委員)